八女燈籠人形成立と伝統文化の継承Ⅰ

A Study of the Traditional Culture of Yame Lantern Dolls Ⅰ

ソーシャルデザイン学科
井　上　友　子
Tomoko Inoue

はじめに

本研究は、2014年から続く「八女福島燈籠人形背景幕」（以下「背景幕」）製作を通じ、「八女福島燈籠人形芝居」（以下、「燈籠人形芝居」）の特質や類稀性を看取したことに端を発する。「燈籠人形芝居」の成立・変遷・現状について、これまで学術的視点で考察された例は少なく、準備や上演など現場の実態が外部に知られることはなかった。筆者は、「背景幕」製作前の打ち合わせ・受け渡し時や「燈籠人形芝居」上演時などに、当事者から聞く様々な話からこの民間芸能の「今」を残す重要性を認識した。

本研究は、「燈籠人形芝居」が担う文化的意義および類似芸能との比較に基づく特質を考察し、成果としてまとめることを最終目的としている。そして本考では、「燈籠人形芝居」成立に至るまでの歴史と上演準備について調査し、報告するものである。

1．歴史調査

「八女福島燈籠人形芝居」について

「燈籠人形芝居」は、奇禍の忌避やその身代わりとして作られた「人形（ヒトガタ）」・熊本県山鹿市の大宮神社に奉納された「燈籠」・大坂（大阪）で隆盛を極めた「人形浄瑠璃」などが融合し、筑後上妻郡福島町（現八女市）で今日の形式が成立した。これら三種の因果性は以下のようなものである。

（1）「人形（ヒトガタ）」

乳児や幼児の生存率が低かった古代、「病・厄災・穢れの身代わり」を担った紙製の「ヒト型人形」が作られ、信仰の対象である「神の遣い」となった。その後、紙製に加え、土製・木製の「郷土玩具」や「子宝・無病息災・五穀豊穣」など、祈りや願いが込められた「伝統行事用具・祭祀用具」が作られるようになり、8世紀末から12世紀末には社寺近郊で「人形回し・傀儡（クグツ）回し・木偶（デク）回し」と呼ばれる「人形劇」に発展した。

（2）「燈籠」

山鹿燈籠と大宮神社への燈籠奉納の起源は以下に見る3説が知られる。

①九州を巡幸中の第12代景行天皇(注1)一行が山鹿の菊池川で濃霧に遭遇した際、山鹿の里びとが一行を松明で山鹿大宮神社まで導いたことを記念し、現社地のある杉山に仮御所（行宮（あんぐう））が設営された。その後、行宮の跡地に天皇を祀る大宮神社を創建し、燈籠を奉納したという説(注2)。

②室町中期、山鹿の温泉が枯れたことから、「山鹿金剛乗寺（こんごうじょうじ）」の「宥明法印（ゆうめいほういん）」が祈祷し、温泉をふたたび湧き出させたという伝説に基づき、宥明法印の没後、追善として燈籠が奉納されたとする説(注3)。

③阿蘇神社の主祭神健磐龍命（たけいわたつのみこと）(注4)が山鹿に向かう途中、茂賀の浦(注5)（図1）の湖底より龍命をからかう声を聞いたため、湖の西端を蹴破ると8頭の大亀(注6)が出て来た。龍命がそれら大亀を退治した後、その霊を鎮めるため、毎年神社に献灯する慣例となったとする説(注7)。

などがある。そしてこれら3節のうち、最も有力視されているのは①の景行天皇一行山鹿立ち寄り説である。

（3）「燈籠の形体」

現在、山鹿に見られるさまざまな形の燈籠については、以下のような記述がある。

①「菊池氏は祭礼の式法を改め、いろいろな燈籠を張り民に捧げる」(注8)

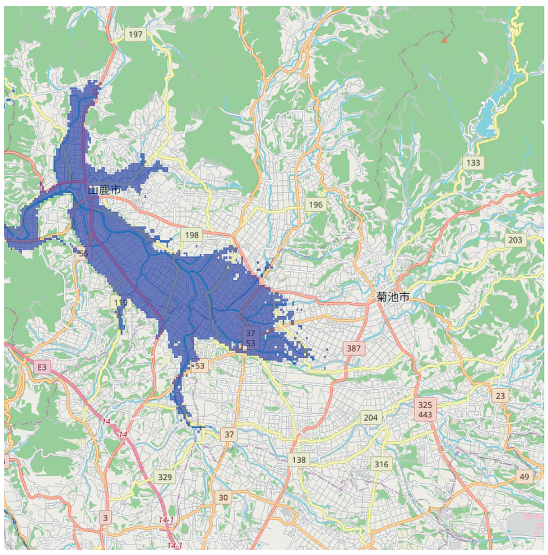

図1　http://doyu-kumamoto.gr.jp/special/teigen/2274/

②「燈籠の細工いや増しに宜しくなり、その名四方に高し」(注9)

③「金燈籠を模した紙の燈籠が作られ、灯火にかえて大宮神社に奉納される習慣となったのが、“紙製の山鹿燈籠”の始まり」(注10)

以上の記録から、室町時代にはすでに祭礼用の燈籠が大宮神社に奉納され現在見られる種類の燈籠に増えたこと(注11)、江戸時代には作りが精巧になったこと、大宮神社に奉納された紙素材の金燈籠は灯火が起首となっていることなどがわかる。

なお、平安時代中期から室町時代前半、天暦から享徳に至る505年間には、計14回の改元が行われざるを得なかったほど天然痘・流行性感冒・麻疹などの感染症や異常気象が多発し多くの人命が失われた(注12)。このことから筆者は、病気平癒や安寧な世を願う行事として「山鹿大宮神社への燈籠奉納」が行われたのではないかと推察している。

(4) 和紙製燈籠の成立について

1592(文禄元)年に始まる「文禄・慶長の役」の際、高麗から加藤清正に帯同し来朝（来日）した春慶・道慶が山鹿に「和紙漉き技術」を伝えている。この時、山鹿で「燈籠」と「和紙」二つの技術が融合し、大宮神社に「和紙製燈籠」が奉納され、慣例化した（図2）。

図2　金燈籠

(5)「浄瑠璃」と「人形浄瑠璃」

15世紀中頃、「浄瑠璃」は琵琶の伴奏による語りとして生まれ、後年、楽器が琵琶から三味線に入れ替わった。その後「浄瑠璃」は、西宮の「操り人形芝居」と融合し、「牛若丸と浄瑠璃姫の恋愛物語」の流行で広く知られるようになり、「人形浄瑠璃」が誕生した。1684年に竹本義太夫が「竹本座」を起こし、また、1703年には竹本座から独立した豊竹若太夫が「豊竹座」を設立し、「人形浄瑠璃」は全盛期を迎えた。

1705年、竹本義太夫は曽根崎心中の作者・近松門左衛門を座付作者に迎え、「義太夫節」の字名で呼ばれるほど人気を博した。1734年、人形操作は「一人遣い」から複雑化し「3人遣い」になり、「太夫（語り）・三味線・人形遣い」の「三業」で表現される総合芸術に発展した。京阪神を拠点に発展した「人形浄瑠璃」は、1751年頃まで絶大な人気を誇り次第に日本中に広がった。

「人形浄瑠璃」は、①神事として奉納されたもの ②地域の娯楽として根付いたもの　③高い芸術性を伴い“文楽”と呼ばれる芸能に昇華したもの などに大別される。

なお、「人形浄瑠璃」と混同される「文楽」は、大正時代に唯一残っていた「人形浄瑠璃」の座元が淡路島出身の上村文楽軒（うえむらぶんらくけん）が立ち上げた興行元・「文楽座」であったことから「人形浄瑠璃＝文楽」とされるようになった。

(6) 山鹿燈籠の八女への伝播

1661年に創建された福島八幡宮の氏子らは放生会にそれぞれの「神燈（灯火）」を飾る習慣があった。1744(延享元)年、熊本県山鹿市の大宮神社から八女福島八幡宮に「燈籠」が奉納され、「神燈」は「燈籠」に入れ代わった。初期の「燈籠」は照明の役割をもつ「ヒト型燈籠」であった。

1761年、「ヒト型燈籠」は「ヒト型の飾り人形を照らし出す燈籠」に役割を変え、人形と共に陳列奉納されるようになった。この「燈籠の灯火に照らし出されるヒト型の飾り人形」が「燈籠人形」の源流である。

(7) 八女における「人形浄瑠璃」の受容と「燈籠人形の成立」

1754(宝暦4)年3月20日、久留米藩で新たに発布された人別銀賦課に反発した百姓16万人による大一揆が起き、60余軒の庄屋が打毀された。筑後上妻郡福島町（現在の福岡県八女市）の大庄屋も打ち壊され、前年1753年に21歳で家督を継いでいた松延甚左衛門種茂（貫嵐・カンラン、1733～1796）は、1757(宝暦7)年25歳で長崎を経由し大坂（明治5年までの表記を使用）に亡命した。

貫嵐は大坂で義太夫節の初代豊竹駒太夫と出会い、1759(宝暦9)年、道頓堀・豊竹座で「福松藤助（陶芋・トウウとも名乗る)」の筆名で読本浄瑠璃「宇賀道者源氏鏡／ウガドウジャゲンジノカガミ」を発表し、人形浄瑠璃作者となった。

筆名の「福松」は、貫嵐の出身地「福島」の「福」と本姓「松延」の「松」を組み合わせたものであり、「藤助」とは俳諧に遊んだ父・菅蘭の俳名でもある（「福松藤助浪華日記」『西岡家・福松家蔵近世文学』1969年)。貫嵐は出身地の名と父の俳名に因む筆名「福松藤助」を浄瑠璃作者名としていた。

1700年代後半になると人形浄瑠璃人気が落ち、1765(明和2)年には豊竹座が閉座したことから、貫嵐は大坂を出て1771年12月、39歳で福島町に帰郷した。その時すでに福島町には山鹿から「燈籠」が伝えられており、1772年、貫嵐は大坂で学んだ「絡繰（カラクリ）人形」の技術を郷里・福島町に伝えた。その後、「燈籠」と貫嵐のもたらした「絡繰人形」が融合し「燈籠の光に照らされ、三味線や太鼓の音色と歌い手の声などの囃子に合わせて動く絡繰人形」となった。これが現在の「燈籠人形」である。

2. 実演にいたるまで

〈計図・設備〉

(1)「演目（芸題)」

人形浄瑠璃の脚本は歌舞伎の台本として使用され、一方で人形浄瑠璃は歌舞伎の場面や演出に刺激されることがあるなど、歴史的にも両者には相互影響が見られる(注13)。

また、人形浄瑠璃の人気作家・近松門左衛門の作品は、時代浄瑠璃(注14)だけでも80余編を数えることから、「人形浄瑠璃」を源流とする「燈籠人形芝居」にも、かつて多くの演目が存在したことは間違いない。

しかし現在では、「吉野山狐忠信初音之鼓（ヨシノヤマキツネタダノブハツネノツヅミ)」「薩摩隼人国若丸厳島神社詣（サツマハヤトクニワカマルイツクシマモウデ)」「玉藻之前（タマモノマエ)」「春景色筑紫潟名島詣（ハルゲシキツクシガタナジマモウデ)」の4編しか演じられない。これら4種の芸題を除き脚本は失われ、大道具・小道具なども散逸したからである（保存会会長談)。

余談として、歌舞伎や人形浄瑠璃では「演目」と呼ぶが、「燈籠人形芝居」では「芸題」とよぶ。

(2)「屋台（舞台小屋)」

「燈籠人形芝居」は八幡宮で3日間行われる殺生を戒める「放生会」で宗教儀式として開催される。上演回数は午前と午後に分け、かつては6回、現在では一日5回である。

舞台小屋は「屋台」と呼ばれ、毎年、秋分の日の一ケ月前に建てられ、「放生会」後に解体される。「燈籠人形芝居」の「屋台」は、歌舞伎や人形浄瑠璃の「芝居小屋」のように恒久建築物ではなく、上演中の限られた期間だけ建てられ、役目が終わると解体されることから「屋台」と呼ばれ

ているようだ。

「屋台」は釘や鎹（カスガイ）を使用しない3層構造であり、幅15.46m×奥行き6.895m×高さ8.01mの「小型」と幅14.83m×奥行き7.67m×高さ8.845mの「大型」があり、芸題によって使い分けられる（図3-1, 3-2）。観客が人形芝居を観賞する2層目（図4）には、漆の朱塗り舞台が設置され、舞台上の両端には羽織袴姿の「後見役」が座る。舞台袖では複数の「横遣い」役が人形の前後の動きを操作する。3層目の屋根裏部分には三味線、太鼓、歌い手などによる演奏と語りが演じられる囃子場があり、外部とは障子で仕切られる。1層目は、外部と木製の壁で仕切られ、舞台（2層目）下で複数の「下遣い」が人形の情感を表す操作を行う。

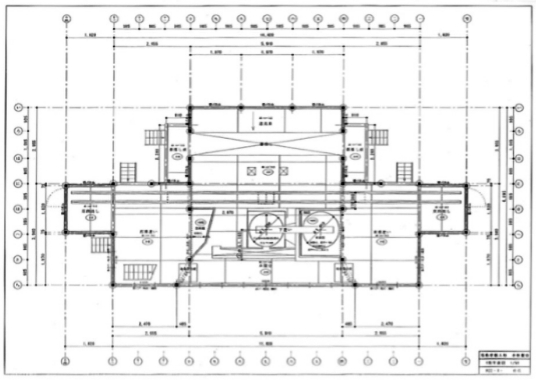

図3-1　小型屋台設計図

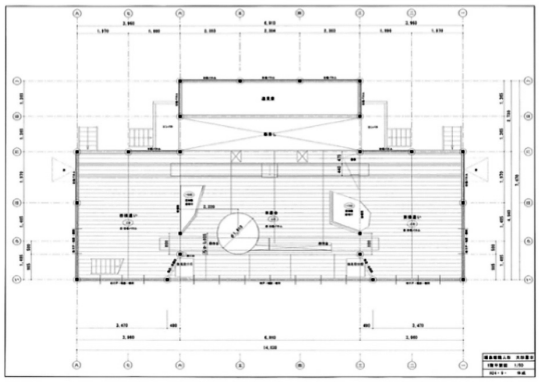

図3-2　大型設屋台計図

図4　屋台2層目

(3)「人形」

「燈籠人形芝居」に使用される「絡繰人形」は、陶製の頭部と木製の骨組みで作られ、髪には人毛が使用される（図5）。オリジナルの人形は、明治末期から昭和初期にかけて行った修復・製作を最後に、80年以上、当時のままの状態だったため破損が著しかった。2004（平成16）年、八女市は愛知県の㈲萬屋仁兵衛工房に1体の修復と8体の製作を依頼し、2008（平成20）年に現在使用している人形が完成した。

芝居のクライマックスには、人形衣装の早変わり「素抜き（スヌキ）」と背景幕の入れ替わりが同時に行われる。両者の変化は瞬時に起こるため相乗効果を生み、観衆のどよめきが会場に沸き上がる。

図5　人形構造

(4)「大道具・小道具」

屋台2層目の背面を覆う風景画は背景幕「遠見(とおみ)」である。物語の場面を説明するための重要な要素となる「遠見」は、小型屋台用では横5300×高さ3100cm、大型屋台用では横6300×高さ3100cmの大きさがある。「遠見」は芝居のクライマックスである人形の「素抜き」場面に合わせ屋台2層目天井から舞台下に荒々しくたたきつけられることから「燈籠人形芝居」の道具の中で最も損傷が激しい。

オリジナルの「遠見」は戦時下の混乱期にほとんどが焼失もしくは逸失し、その面影を偲ぶことができず、また、戦後の混乱期に無名の看板職人が当座の間に合わせで描いたとされる「遠見(とおみ)」もダメージが強い（保存会談）。加えて、「薩摩隼人（省略）」第2幕・「春景色（省略）」第6幕は、当座の間に合わせで戦後に描かれたものも焼失し、構図さえも不明である。

〈人〉

(1)「遣い」

人形の動きを操る技術者を「遣い」と呼ぶ。2層目舞台袖で人形の前後の動きを操る「横遣い」は、人形をレール上に乗せて滑らせ舞台で前後に移動させる。場面毎に数キロの人形を差し替えるため、3～4人で操作を行う。

1層目で人形の繊細な動きを行う「下遣い」は頭部と右手を操作する「主遣い」、左手を操作する「左遣い」、足を操作する「足遣い」の3役があり、時として補助役も加わり3～4人で1体の人形を動かす。「下遣い」は2層目の下から人形を操作する過酷な体勢が強いられ、限られた人形の顔の表情を身振りや動きで補い、情感豊かに表現することが求められることから高い技術力が必要である（図6-1, 6-2）。

(2)「囃子」

大太鼓・銅鑼・小鼓・三味線・横笛などで構成される「囃子」は、幕前・人形入れ替え・幕後・間合いなど、演出全般に関わる「鳴り物」を担当する。最終公演には、外部と仕切られた障子が開けられ、「囃子場」が観客に披露される（図7）。

図6-1　横遣い

図6-2　下遣い

図7　最終公演

(3)「後見役」

舞台両袖には、人形の演技を見守る「後見役」と呼ばれる羽織袴姿の2人の子供が左右に座す。歌舞伎や舞踊など他の舞台芸能と異なり、「燈籠人形芝居」の後見役は芝居の進行を見守る役割であり、歌舞伎のように出演者の装束を整えたり、小道具を扱うなどの技術的役割を担わない。かつて「後見役」は未就学～小学校低学年の男児に限られていたが、少子化の影響から小学校高学年まで対象年齢を引き上げ、女児も加えるようになった（図8）。

(4) 道具遣い等上演関係者

「人形横遣い」「人形下遣い」「囃子」「語り」のほか、「人形衣装の縫製」「人形衣装の気付」「背景幕の切り替え」「後見役」「後見役入れ替え」「緞帳開閉」「一丁柝合図」などはすべて人が直接かかわり、ほとんどの役割が複数名で構成されるため、上演関係者の総数はしばしば50名を超える（図9）。

図8　後見役

図9　人形衣装縫製

まとめ

以上みてきたように、「八女福島燈籠人形芝居」はいくつかの文化・慣習が融合し八女で成立した民間芸能である。「燈籠人形芝居」の特色は、我が国の代表的芸能文化「人形浄瑠璃」や「歌舞伎」などの要素を内包しつつ、確かな在郷文化として守られ継承されているものの、経済的・人的充足率が低く、このまま文化が継承される保証はない。

このような問題が顕在化した今、「人形浄瑠璃」や「歌舞伎」と歴史的変遷・文化的意味において比較・検討しながら、地域に根付いた民間芸能「燈籠人形芝居」の文化的重要性について学術的考察を加える意義は大きい。

註

1　西暦71年（景行元年）～131年（景行60年）・日本武尊の父
2　大宮神社の由来
https://oomiya.pigboat.jp/oomiyajinjyatoha/yuisyo.html。現在では熊本県神社庁から献弊使を迎える際に執り行われる「献弊祭」に関連し、午後10時に燈籠を奉納する「上がり燈籠」、午後12時に奉納した燈籠を燈籠殿に納める「下がり燈籠」の神事と、燈籠踊り保存会による「千人燈籠踊り」などが実施される。
3　山鹿灯籠の歴史
https://wa-gokoro.jp/traditional-crafts/724/
4　初代神武天皇の孫・阿蘇神社の主祭神
5　古代の山鹿にあった広大な「湖」の湖底。現存せず
6　元から住む住民のこと
7　山鹿灯籠の歴史
https://wa-gokoro.jp/traditional-crafts/724/
8　山鹿の歴史・伝承・自然などが書かれた郷土誌『鹿郡旧語伝記』1772／江戸安永元年に書かれた室町時代応永年（1394年～1428年）の記録：山鹿大宮神社御由緒パネルより
9　江戸期宝永（1704～1710年）正徳（1711～1715年）年間の記録：山鹿大宮神社御由緒説明パネルより
10　「山鹿灯籠　～熊本の国指定伝統的工芸品。特徴や歴史について」：
特産名産ものがたり
https://tokusan-meisan.info/yamagatourou/
11　金燈籠「座敷作り・五重塔・宮作り・城造り・鳥籠・古式台燈・矢つぼ」などがある。
12　天暦（947年）、永久（1113年）、大治（1126年）、応保（1161年）、長寛（1163年）、安元（1175年）、治承（1177年）、建永（1206年）、承元（1207年）、嘉禄（1225年）、嘉禎（1235年）、乾元（1302年）、弘和（1381年）、享徳（1452年）
13　「浄瑠璃界と劇界　浄瑠璃と歌舞伎の関係」『文化デジタルライブラリー　創作とその時代』
https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc21/haikei/jidai2/ji3c.html
14　歴史的事件、伝説的人物を題材とした浄瑠璃